

史跡 佐貫石仏保存活用計画

(公開用 ※抜粋)

史跡保存と活用課題



平成 28 年(2016)3 月

栃木県塩谷町

史跡保存と活用の課題

1. はじめに

第1章の概要で見てきたように、本史跡の指定を行った大正15年当時においても、磨崖仏石仏は劣化と判別不能の箇所があり、ここ90年余りでの顕著な劣化の進行は十分には見てとれないものの、一部に剥落や、明らかな劣化箇所が認められる。少なく見積もっても製作時より900年あまり経ていること、とりわけ近年の環境に著しい変化(酸性雨などの劣化要因の増大ほか)などから、保存活用推進の出発点として、恒久的な保存と活用に資するため、継続的な調査・管理体制及び保存方法の確立が求められている。

2. 石仏の劣化と保存修復技術の確立

一般的に石造物の劣化を促進する要因とそれへの対処には次のようなことが知られる。

(1) 岩石の性質そのものに起因する(岩質の詳細調査と解析)

石造物が線刻された岩体それ自身の岩質(化学的・物理的性質や組成)をより詳しく解析することにより、岩石の土壌化・粘土化の進行速度を予測することができる。こうしたことからさらに様々な角度からの分析が必要となる。

(2) 自然環境に起因する(周辺環境の詳細調査と解析)

本佐貫石仏は巨大な独立する岩体が南に露岩するところに構築されている。至近に鬼怒川が流れておりその本流に堰が設けられていること、また、導水のための佐貫頭首工が設置され常に1m程度の落差をもつ堰など人為的な瀑布が形成されているところである。その結果植生にもみられるように佐貫独特の環境が形成されている。岩体に付着して暖性の植物がみられることなどから、岩体そのものが蓄熱する熱量の多さや安定的な湿環境が形成されていることが予想される。環境因子による劣化の中では冬季の場合、たとえば岩体そのものが凍結と融解を繰り返せば、劣化は明らかに促進される。岩石の凍結融解は風化を促進することは保存上特に注意を促すものとされている。

「凍結・融解サイクルの出現頻度は、具体的には1日の最高気温と最低気温の開きが0℃を境として±4℃以上ある日(凍結破壊注意日と呼ぶ)を指している。実験によると大谷石のような軟らかい凝灰岩では50回のサイクルで空隙率が約5%近く増加するとの結果がすでに東京国立文化財研究所の研究で明らかになっており、凝灰岩より硬い安山岩でも期間の差はあれ、石劣化につながる特に覆屋のない磨崖仏などは注意を要する。」(出典：大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第18集 『石造文化財の保存対策のための概要調査―石造文化財の基礎調査報告書―』平成8年3月31日 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館)とされている。

また岩体そのものに生じている亀裂などに腐植土が溜り、灌木が生育し、その樹根を伝わって浸透する水分などにより亀裂や剥離の進行を早めることがある。

(3) 人為的な作用に起因する(保存体制の確立)

佐貫石仏の岩体下部には農業用の導水路が設備されている。導水路の工事が行われた昭和38年(1963)に、同じ史跡地内で、洞穴調査を行っていた海老原郁雄氏は、「この頃、風見発電所の導水路建設が進められていた。佐貫石仏の直ぐ上流に取水口施設、それに接続する隧道が山裾を抉ってつくられており、ハツパで岩盤を砕く工事が行われていた。ハツパで飛ばされた岩石は、発掘現場近くにも落下し」(『塩谷町史』(第四巻 通史編 P173))と証言している。このような振動は直接的な劣化要因

になる。当初区域では劇的な交通量の増大や振動発生源の存在は予想できないが、頭首工及び導水トンネルのための各工事などの影響をこうむることは予想される。また人為的な破損では貴重種である地衣類の採取などを目的としたと考えられる小さな剥離面もいくつか見出せる。

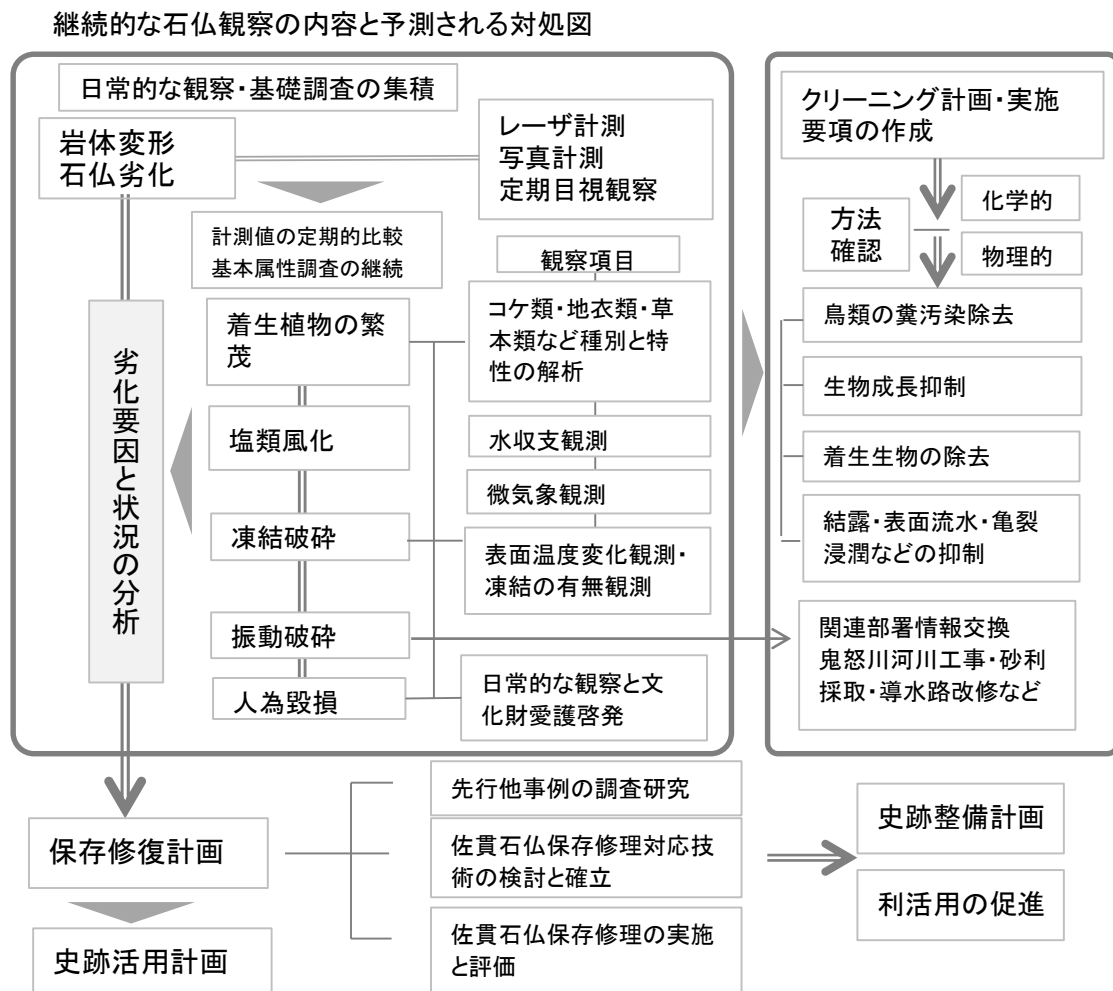
こうした劣化要因、破損要因は複合的に起こる場合がある。そのための精緻な基礎データの収集と対応として石仏の保存技術の確立が求められる。亀裂の状況でも検討したように、岩体の一部には既に表層が「浮いている」状態の箇所も認めらる。このことから早い段階での精確な計測と保全・修復技術の検討が必要である。その為には、専門的な分野からの助言を得るため保存技術検討部会(仮称)などを設置して、すみやかな対処の検討を行うものとする。

3. 継続したモニタリング(経過観察)と調査・研究体制の確立について

(1). モニタリングについて

1). モニタリング内容と考え方

2で検討した課題をについて検討していくうえでは継続的なモニタリングが必要である。その課題と予測される対処や保守・保全活動について以下にまとめた。



2). モニタリング体制について

上記のモニタリングを確実に実施していくためには、国及び県の指導の下恒常的な保存管理活用検討委員会(仮称)の設置し、中長期的な視野から検討を行い、さらに専門分野の外部識者の指導(技

術部会)を得て、観察を行っていく必要がある。また、モニタリング等の実施に当たっては地域住民との協働を計り、今後の利活用の運営をも想定した体制の枠作り(活用部会(仮称)など)が必要である。

(2). 継続的な研究体制の確立と実施について

本石仏について、その本質的価値の検討は十分ではない。背景として文献資料、石仏技術史(美術史)の検討、信仰形態の歴史的検討、発掘調査などを経た中近世におけるC地区の景観復元など追究すべき課題は多い。その為の継続的な調査・研究の体制をくむことが必要である。

1). 史跡の本質的な価値の評価について

石仏を取り巻く考古学的な検証は過去2度の発掘調査においては未検出である。石仏及び寺院前の平坦な敷地には歴史的にどのような建物(堂宇)などが造立されていたのか、利用されてきたのかも審らかではない。文献や伝承に表現されている「慈恩寺」などもその詳細はかすかな伝承によっている。周辺を含みどのような宗教景観が継続されてきたかは、古代末から中世初頭をテーマとした石仏や小洞窟(奥ノ院)などの信仰風景を知るうえで重要である。こうした評価も行えるよう。考古学的な手法による調査や継続した文献調査などが求められる。

2). 石仏美術史のからの検討

美術史家西村貞(1893-1961)は、昭和18年(1943)に日本仏教文化における石仏について、当時の一般国民及び研究者の「無関心、無頓着」について警鐘をならし、「石仏の大部分は、雨風の浸食と人為の破壊とにゆだねられて、日ごとに壊滅してゆく状態である。これが研究調査は日本文化史上の重要な一課題たるべきものであって(略)」(『奈良の石佛』序文より)と、その保存と研究の重要性を訴えた。また濱田耕作(1881-1938)らの『豊後磨崖石仏の研究』(大正14年(1925):京都帝国大学研究報告書第9冊)に触発を受け、戦後も「石造美術」の牽引者でありつづけた考古学者・美術史家の川勝政太郎(1905-1978)も『日本の石佛』(昭和18年、晃文社)を表し、国内における石仏を体系的に叙述した。

西村は『奈良の石佛』において佐貫石仏について次のように言及している。

「鬼怒川沿岸の大巖崖に線刻をもつて金剛界の大日如来坐像をあらはしたもので、俗に佐貫の大佛と稱されてゐるのがそれである。像高約五丈の大像で、蓮座高のみにて一丈二尺あり、頭部の長約一丈、顔面の幅約五尺四寸、その雄偉驚くべき像容は、まさに豊後熊野の大日如来の半肉像と一二を争ふものである。これまたその造顯年代は平安時代と推定せられる。蓋し、時期をほぼ同じくして、本邦僻遠の地に斯くも大規模の磨崖佛の造立が行はれてゐることは、一面、佛敬信仰とその文化の浸潤を物語ること勿論であるが、他面また石彫の技術が當時いかに發達進歩を遂げてをつたかを如實に示すもので、わが國の石佛像が、大陸に比して、何ら發達をみるに至らなかつたかの如く、揣摩する世人の迷蒙を打破して餘りありと謂つべしである。」(『奈良の石佛』昭和18年P.28:全国書房)

戦後になって独自の視点から石仏について研究を行っている佐藤宗太郎(1936~)は、『石仏の解体』において「佐貫の大日如来磨崖仏は、大谷寺磨崖仏と対蹠的な造形志向を示す。鬼怒川のほとりに屹立する五十メートル余の大岸壁に、極く簡単な線彫で像高約二十メートルの大日坐像が刻まれている。現在は仏顔とわずかな肩の線、それに蓮華座の一部を残すだけである。もともと線刻像だから像自体の立体感はほとんど無い。いまここにあるもの、(またかつてあつたもの)は不動なる岩の実存感、そしてそこから発する宗教性だけである。仏像は岩の表面に浮かんだ影のごときものである。しかし、それであってもこれは確かな〈岩の造形〉である。私はここにも、仏教文化がとことんまで文化的氣層に深降し、自然崇拜に完全に吸収された一つの〈極まり〉をみる。やはりそこには〈岩〉とそれに対

する確固たる信仰に支えられた大きな(宗教的内実)がある。』(『石仏の解体』P.248、昭和 49 年(1984)、
學藝書林) という指摘を行っている。

このように佐貫石仏について、その宗教祭祀域を含めた空間的な構造の把握や信仰空白期間(鎌倉
室町から江戸初期)を含めた地域の宗教事情をはじめ、広く石造美術史の中で体系的にとらえ直し東
日本とりわけ関東・南部東北域の日本仏教史および石造物文化研究に貢献していくことが求められる。

4. 利活用について

(1) 活用の意義

国史跡である「佐貫石仏」は、国内屈指の巨大な磨崖仏として貴重な歴史・文化遺産であることから、
文化財としての価値の周知及び積極的な活用方策を検討するとともに、町民のみならず国民の貴重
な財産として後世に継承していくために、学校教育や生涯学習活動の場での利活用、加えて、地域
活性化を図るために、さらなる普及啓発活動の支援を行うことも重要である。

また、当地域は「佐貫観音自然環境保全地域」でもあり、貴重種の植物や鳥類も生息している。我々
の祖先も見たであろう佐貫石仏を中心とした日光連山を望む鬼怒川からの景観も、「佐貫石仏」と同様
に守っていかなければならない。

このように「佐貫石仏」及びその周辺も含めた歴史や自然は、貴重な遺産であり、積極的かつ有効
に活用するものであり、今後詳細な活用計画を検討する必要があるが、当面の方針として下記の活動
を行うものとする。

(2)活用の内容等

1) 周知活動・情報発信

- ・「佐貫石仏」のパンフレットの作成や町ホームページ等による周知・情報発信。
- ・「佐貫石仏」及びその周辺を含めた魅力や価値について各種メディア等を活用して、情報を提供
して伝えていく。

2) 調査研究

- ・「佐貫石仏」に関する講座の開設や周辺の発掘作業による現地説明会の実施、
その他、調査研究の成果発表等を行う。

3) 普及啓発活動

○「佐貫石仏」を活用してのひとづくりや地域活性化への支援・活用

- ・東海寺や佐貫地区活性化推進協議会との連携・協働を図り、地域住民が主体となつての史跡及
びその周辺を含めた環境整備や維持管理体制を構築する。
- ・「佐貫石仏」が地域の貴重な文化財であることの地域住民の意識の醸成を図り、常日頃から地域
住民ならでの「佐貫石仏」を見守る(観察)ことを啓発していく。
- ・地域住民やボランティア等が常日頃から「佐貫石仏」を見守る(観察)ことで、地域住民等か
らの目線でのモニタリング活動の助成につなげていく。
- ・「佐貫石仏」周辺の文化財等の資源をいかした歴史散策や町で作成した『ウォーキングマップ』
を活用するとともに佐貫周辺の案内を行うための地域住民のボランティアを養成し活用してい
く。
- ・「佐貫石仏」の活用支援と合わせて、他の観光資源の掘り起こしや道の駅等の施設との連携によ
り活用を図っていく。

(3) 学校教育・生涯学習活動としての活用

- ・現在、小学校及び中学校の一部で教育活動として利用されているが、今後は町内全ての小・中学校での学習活動での活用を図るための「佐貫石仏」への理解を深めるために各学校等の連携を図ると共に積極的な支援を行う。
- ・生涯学習センター活動や各コミュニティセンター活動での地域住民への学習機会や学習の場を提供するとともに周知を図る。
- ・「佐貫石仏整備活用委員会（仮称）」の委員の先生方をお招きして、専門的な講話を行ってもらい、地域住民や町外者を対象としての講座や講演会を実施する。
- ・学校教育や生涯学習活動等での活用を行うための人材育成を図る。



写真 6-1 佐貫石仏前に集う人々
2015年3月15日

史跡 佐貫石仏保存活用計画

発行日 平成 28 年 3 月

発 行 塩谷町教育委員会

〒329-2441 栃木県塩谷町大字船生 989-1